



近代家族の形成と生活改善問題(一九九六年度第一回
コロキウム)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小山, 静子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004992

1996年度第1回コロキウムについて

近年、家族の変容や多様化が現代社会を特徴づける社会現象として注目を集めるとともに、近代における固定的な性役割および性差別の成立という観点から、家族を問い直す動きが活発である。第1回コロキウムは「日本における近代家族の形成と展開」をテーマに、現代社会における女性の状況を考える際に欠かすことのできないものとして近代家族を取り上げ、その形成と現在に至る展開の過程について、小山静子さんと古久保さくらさんをお招きし、おこなった。

小山さんは、戦前の女子教育理念として知られる良妻賢母主義を、天皇制国家であった戦前日本の特殊な「遅れた」女性観としてではなく、欧米の近代国家や戦後日本社会にも共通する近代思想としてとらえ、近代的な性役割分業および近代家族の成立について研究を蓄積され、91年に『良妻賢母という規範』と題する著作をまとめられている。古久保さんもまた、全国の農村に普及していた雑誌『家の光』の内容から、昭和初期の農村において母親にもとめられた規範がどのようなものであったのかを分析するなど、近代日本における家族や性役割というものを研究テーマとしてこられた。歴史研究の立場から、近代家族について追究してこられたお二人を迎えて、現在それぞれ取り組んでおられるテーマ、小山さんからは「近代家族の形成と生活改善問題」について、古久保さんからは「近代家族の植民地への展開」について発表していただいた。

続いて、お二人による歴史的な研究を現代家族の状況と関連づける観点から、本学人間関係学科の井上真理子さんが「近代家族——戦後の展開」と題して短い発表をし、最後に参加者で討論をおこなった。（木村涼子）

近代家族の形成と生活改善問題

小 山 静 子

はじめに

生活改善とは、私生活の全般にわたって、能率的、合理的、科学的とい

った観点から改善を試み、「よりよき」生活のあり方を提示していくことである。それは第一次世界大戦後に政府の政策課題として登場し、文部省の社会教育行政を中心に、主に都市に住む新中間層の家族を対象に熱心に取り組まれていった。もちろん、従来の生活のあり方を改善し、家庭文化を創造していこうとする志向性は、すでに日露戦争後の社会において見ることができるが、このような動きと軌を一にしながら、国家もまた新しいライフ・スタイルの創出をめざし、私的な家内領域に介入していったのである。

なぜ政府が生活改善問題に関心をもち、政策として取り組んでいったのかという問題に関しては、すでに拙稿「第一次世界大戦後の生活改善問題」(『立命館言語文化研究』8巻2号、1996年)¹において詳述しているので、ここでは繰り返さない。が、簡単に述べると、それは「家庭の文明化」という課題のゆえであった。すなわち、国家の基礎である家庭が旧態依然とした「遅れた」状態にあることが問題視され、欧米に対抗できる国家の建設のためには、日常生活の改善こそが重要であると考えられたのである。このような視点から家事への科学の導入、生活の合理化・能率化の推進が図られていった。

そして政府は、生活改善運動を展開するにあたって、様々な展覧会を開くとともに、指導者講習会、婦人講座、母の講座、講演会を開催し、多様な啓蒙活動を繰り広げていった。とりわけ1920(大正9)年前後の数年間は、文部省や内務省によって多くの展覧会が開かれ、生活改善に深い関わりをもつ展覧会として、生活改善展覧会(1919年11月-1920年2月)・「時」展覧会(1920年5月-7月)・児童衛生展覧会(1920年10月-11月)・消費経済展覧会(1922年11月-12月)の四つをあげることができる。

これらの展覧会では、図表、写真、模型、あるいはモノそのものなど、実に様々なものが展示され、展覧会を訪れた人々は、これらの展示物を通して、新しい生活のあり方のイメージやモデルを知ることができた。ただ、これらの展示物がすぐさま人々の生活に取り入れられ、実際の生活に役立ったかという点、それはかなり疑問である。なぜなら、見ることと実行することとの間には大きなギャップがあり、展示物はあくまでも展示物でし

かないからである。しかしだからといって、これらの展覧会が無意味だったかといえばそうではないだろう。というのも、これらの展覧会は、普段意識化することなく過ごしている日常生活のどこに「問題」があるのか、どうすれば「よりよい」ものとすることができるのか、という問題意識を人々に与えたからである。いってみれば、これらの展覧会を通して、外側からの視線にさらされ、改善する対象としての私生活が浮かび上がってきたのであり、そのような視線の形成こそが、展覧会のもっていた意義であった。それはまさに、国家による新しい生活像、家族像の啓蒙という営みだったといえるのである。

また、生活改善展覧会の開催をきっかけとして、1920年1月に文部省の外郭団体として結成された生活改善同盟会は、住宅、服装、社交儀礼、食事などに関する改善事項を検討するための委員会を組織し、1920年から1921（大正10）年にかけて次々と改善事項を発表していった。そしてその内容は、『教育時論』や『婦女新聞』などにすぐに公表されるとともに、1924（大正13）年には、生活改善同盟会より『生活改善の葉』『住宅家具の改善』として出版されている。

このようにして、具体的な生活改善のあり方が明らかにされていったのだが、そこにおいて語られる家族像とはいったいどのようなものだったのだろうか。以下、生活改善同盟会が提案した改善事項や展覧会の展示物などを素材としながら、その家族像を検討していくこととしたい。

1. 家族中心の生活

まず、第一に指摘しておきたいことは、家族を中心とした生活を重視していこうとする志向性が存在していることである。つまり、夫や家長といった男性を中心として成り立っている家族生活ではなく、女性や子どもの存在をも十分に考慮に入れた生活が営まれるべきことが主張されていた。この志向性は住宅改善において、もっとも明確にみることができる。たとえば、次の文章は住宅改善に関して生活改善同盟会が出した方針であるが、そこでは接客本位の間取りから家族本位への間取りへと転換していくことの必要性が語られている。

「客間に対しては住居の枢要な部分を充て、良好な方位に於て、多大の面積を割き、過大の設備をして居るにも拘らず、茶の間居間等常住の室に対しては、其の位置及び面積に於きましても遠く客間に及ばず、僅に附随的たるに過ぎない様な従来の通弊を矯めることは実に今日の急務であります。故に将来の住宅は客間及び玄関よりは、寧ろ居間食事室寢間台所等に重きを置いて、家庭生活を大に愉快にして、常に清新の気を漂はせることを主眼としなければなりません」（『住宅改善の方針』『教育時論』1920年8月15日）。

また、庭に関しても、次のように家族本位の庭造りをすべきことが述べられていた。「庭園は在来の接客並に観賞本位に偏せず、寧ろ家族全体の利用に重きを置き、其の地割の如きも住家の間取と親密に關聯させて、常住の居室に面する部分を全庭園の中心にしなければなりません。又在来の築山泉水式に偏しないで、主婦子供等のために芝生・緑蔭・花圃・菜園・砂場等の如き設備を為し、之と同時に日蔭地・空地及び空間の利用に努め、特に台所廻りの整理を行つて、其の不潔や乱雑を避ける様に工夫することが大切であります」（同）。

このように、生活改善同盟会は家族が憩う居間や茶の間、あるいは子どもたちが遊び、主婦が花や野菜を作る庭を重視した住宅をめざしていたのである。そしてその具体的な住宅のあり様は、生活改善展覧会での「改良住宅模型及図面」や消費経済展覧会での「既成日本住宅の改造」に見ることができる。時あたかも、新中間層の増加に伴い、東京や大阪では私鉄沿線に彼らのための郊外住宅、すなわち建坪20坪程度の、和洋折衷型、中廊下型、居間中心型という従来にない新しいタイプの住宅が続々と建設されつつあった。このような新しいタイプの住宅が社会的な関心を集めつつある中で、生活改善同盟会でも家族本位というコンセプトを打ち出したのであった。

このような家族中心の考え方は、住宅改善にとどまらず、食事の改善においても表明されている。たとえば、生活改善同盟会は、「家庭の料理法は在来の主人本位の偏頗な風を破つて、婦人子供老人等家庭全体に適する様に改めたいと思ひます」（『生活改善の栞』90ページ）、「食事中は常に精

神を落ち附けて出来るだけ愉快の心持を失はぬ事が大切であります」(同、97ページ)、と提案している。夫や家長を特別扱いして彼らの嗜好に合わせた料理が準備されている現状を改め、家族全員を念頭においた料理とすること、そして家族が食卓を囲み、団欒のうちに食事を行うことをめざしていたことがわかる。

また娯楽や社交は、従来の男性中心のものから、家族を単位としたものへと転換していく必要性が主張されている。生活改善同盟会がまとめた宴会に関する改善事項には、次の事項が盛り込まれていた。「我邦の宴会は、或特殊の場合を除く外は殆ど男ばかりの会になつて居ります。之れが為め宴会本来の目的を充分達成する事が出来ぬばかりでなく種々の弊害が伴ひます。故に将来は公私何れの宴会にも、出来るだけ夫人は勿論相当年齢に達した家族を主人と併せ招待する様にし、また単に親睦を目的とする宴会などには成るべく婦人をも同伴出席する様に致したいと思ひます」(同、15ページ)。

そしてこのような家族ぐるみの活動は、娯楽の場においても求められており、「時」展覧会では、「家族娯楽時用の活動写真機」や「東京を中心とする日帰りの遊覧地図」などが展示してあった。家族をあげて楽しむこと、一家の団欒が追求されていたことがわかる。

このような家族生活を重視する態度は、非常に興味深いことに、「祝祭休日は、一家団欒して休養娯楽に費す事が今日は普通になつて居ますから、(訪問は——引用者)成るべく避ける様にしたい」(同、21ページ)というように、団欒の場に家族以外の者が入るのを避けようとする志向性ともつながっていた。これは、訪問・接客・送迎に関する改善事項として掲げられていることであるが、これ以外にも、あらかじめ時間の打ち合わせをしてから訪問すること、面会時間を定めておくこと、訪問は用件を中心に手短にすませること、といった提案がなされている。

これらは、時間の尊重という観点から指摘されているのだが、それだけでなく、ここからは決められた時以外に他者が家庭に入ってくるのを拒もうとする意思を読みとることもできる。つまり、ごく日常的に行われていたであろう、他家への予告なしの訪問や、長時間にわたる接待や雑談は、

家族という私的なプライバシーの未確立や社会的な紐帯の強さ、共同性の確認を物語る習慣であるが、それがここでは「問題」あるものにとらえられているのである。そしてあるべき訪問・接客の仕方を示すために、「時」展覧会では「人の迷惑を構わぬ訪問諷刺画」や「名士の接客日一覧表」、生活改善展覧会では「贈答接待訪問の改善に関する調査並諷刺画」などが展示されていた。

このように、家庭を社会と一線を画した空間であるにとらえ、私的な家族生活が重視されていったのだが、このような家族観の変化は、家族生活のスタートである結婚に対する改善を促すものでもあった。生活改善同盟会では、当時の結婚がかかえる問題を、「今日我邦では、結婚の根本義である相互の人格や健康若くは将来の責務等は比較的重視せず、却つて支度、披露、祝儀等外形に属する事にばかり力を入れ、兎角虚飾に流れる弊があります」（同、3ページ）と認識している。その上で、婚約の際に相互の健康診断書を交換することや、婚約前後には両親の監督の下になるべく交際機会を多くして、お互いの性格や趣味などを知り合うことの必要性を提言している。「家」と「家」との関係性を重視した結婚ではなく、婚姻する当人同士の関係性を重視した結婚へと転換を図っていこうとするほのかな変化を、ここから読みとることができるだろう。

ただ、生活改善同盟会が提言しているのは、ここまでである。この当時、女子教育関係者の間では、夫婦関係を朋友の関係あるいは相思相愛の「対等な」関係へと改良し、「民本的な家庭」を造ること、あるいは結婚制度や家族制度を改善することが主張され始めていた。²いずれも妻と夫の関係を上下関係ではなく、「対等な」関係にしようとする意思がその根底に存在していたのだが、生活改善同盟会にあっては、このような家族関係を創出していこうとする意見は、見いだすことができなかった。

2. 子どもへの強い関心

このように集団性を重視した家族にあって、とりわけ子どもは強い関心が払われる存在となっており、このことが、生活改善問題で語られる家族像の第二の特徴であった。

すでに述べたように、住宅改善においては、家族本位というコンセプトが打ち出されていたが、家族の団欒を中心にすえた上で、さらに部屋の機能の明確化が図られ、生活改善展覧会では「育児室模型」や「主婦執務室模型」、児童衛生展覧会では「中流家庭に於ける児童室」などが展示されていた。従来の家屋では、子どもや主婦という家族構成メンバーのそれぞれを想定した部屋づくりがなされてはいなかったもので、このような展示物があること自体画期的なことであったが、特にここで注目したいのは子ども部屋である。子どものためには特別な空間が必要であると認識されているのであった。

しかも、子どもへの特別な配慮は、部屋だけでなく、家具や服にも示されていた。生活改善同盟会は次のように提言している。「児童用の家具を椅子式に改めるべきことは、彼等の本性に顧みて寧ろ当然の要求でありますから、其の改善には特に留意したいと思ひます。尚ほ改良家具の使用は成るべく子供の幼少の頃から始めるやうにし、其の年齢に応じ意匠と寸法とに注意しなければなりません」(前掲「住宅改善の方針」)。「活動は児童の本性でありますから、出来得るだけ其の要求を満足させ、運動の自由を妨げぬ様にする事は児童教養上極めて必要であります。然るに在来の和服は頗る不便で、児童の此の要求に合ひませんから、速に一層軽快自由の動作に都合の可いものに改めなければなりません」(『生活改善の葉』59ページ)。

このように子ども用の椅子や洋服の必要性が主張されているのだが、子どものための家具や子ども服という発想自体が、従来にない新しいものであった。しかも、その必要性の論拠は「児童の本性」に求められており、子どもは大人とは異なる存在であるがゆえに配慮されるべきであり、成長に応じた考慮も払われるべき存在であると認識されていたことがわかる。

そして子どもへの多大な関心を端的に示すものが、「児童」という名称が冠せられた、内務省による児童衛生展覧会の開催であった。すでに民間においては、1909(明治42)年より開始された三越百貨店における児童博覧会のように、「子ども」に焦点をあてた催し物は多数開かれていたが、政府が「子ども」の問題に焦点を絞った展覧会を開くのは、これが初めて

のことであった。その開催趣旨は次の通りである。「一家の消長一国の盛衰は繫て次代の国民たる児童の双肩に在り。……然るに我国に於ては殊に子女を愛撫する風あり、且古来生母親ら哺育するの良俗あるに拘らず幼者の死亡率歳々遞増し、其の高きこと近年文明国中殆んど他に比類なきを見るに至る、邦国の為め真に容易ならざる一大現象と謂ふべし。是れ今回当省が児童衛生展覧会を開催し、児童に関する衛生思想を普及し、第二国民の保健増進に資せんとする所以なり」(『日本社会事業年鑑』1921年版(復刻版、文生書院、1975年)72-73ページ)。

このように、児童衛生展覧会は、欧米に比べて格段に高い日本の乳児死亡率(1920年で1,000人あたり約167)を低下させるために、衛生思想の普及、「第二国民」の保健の増進をめざして開かれたのである。そしてここでは、展覧会での展示ジャンルに従って示せば、次のようなものが展示されていた。

妊娠と分娩——妊娠及産褥の心得、胎児の發育順序、分娩の開始と終了時間調

養護——育児の心得、児童身体検査表、児童衛生に関する警告的絵画、健康児の發育、衛生施設概況、運動遊戯の実況、学校衛生

住居と用品——児童の寢室と居間、家庭用玩具・絵本類、児童運動用具一揃

疾病と治療——家庭薬品一揃、小児の諸疾患、児童の口腔衛生一般、体温器検査

栄養——誕生より入学までの衛生、児童の飲食物、人乳と人工栄養との比較及離乳期の食物、人工栄養児と天然栄養児との死亡率の比較・授乳方法其他、小児の菓子

被服——年齢別児童服、児童改良服、襦袢及小児寝具一式、学校児童改良服³

つまり、妊娠から始まって、出産、乳幼児期、そして学童期に至るまで、子どもをめぐる、衛生、健康、育児、栄養、病気、服装などに関する様々な知識・技術がここで展示されていたことがわかる。そしてこれらの出品者は医学者あるいは教育機関や医療機関などであり、これらの知識・技術

は、長年、親から子へ、姑から嫁へと伝えられてきた経験知ではなく、医学などの学問からもたらされた「科学的」な近代知であった。乳児死亡率を低下させるという国家的な課題があったにしろ、子どもという存在に様々な領域から関心が払われ、「よりよき」育児のあり方が追究されていたことがわかる。

3. 性別分業の下での妻・母役割

さて、生活改善問題が語る家族像の第三の特徴は、その家族には明確な性別役割分業が存在していることである。すなわち、家庭から離れた職場へと通勤する俸給生活者としての夫と、家庭にあって専業主婦として家事・育児に専念する妻、という家族形態を前提とした上で、そこでの生活改善の方策が語られていた。そして生活改善が、女性が担うと考えられている私生活のあり方にまなざしを注ぎ、その改善を図るものである以上、新しい生活像が提示されていくことは、女性がこれまで行ってきた家庭内役割が見直され、女性に新たな役割が課されていくということでもあった。すなわち、女性のあるべき生き方を示す、良妻賢母という規範自体には変化がなくても、妻として、また母としての役割の内実は変化していったのである。

すでに述べたように、子どもへの関心が高まっていたが、このことは女性が家庭での母としての役割を今まで以上に十分に果たすことが必要となってきたことを意味していた。たとえば、児童衛生展覧会で展示されていたの多くの知識・技術を、母は身につけることが望ましいと考えられているのであった。

しかし母役割以上に、妻役割の内実は大きく変わり、その役割は重要なものとなっている。世紀転換期に成立した良妻賢母思想においては、妻役割よりは母役割への期待度が高く、妻は内助や家政を果たすべきことが漠然と語られるにすぎなかった。が、ここに至り、まず食事の改善問題が登場してくる。たとえば、生活改善展覧会では「農産物カロリー表」や「安価滋養日常食膳模型」、消費経済展覧会では「主要食品の市価と栄養価」や「ビタミン含有食品」が展示され、栄養や滋養という観点で食事を考え

ていこうという志向性がはっきりと出てきている。カロリーやビタミンという言葉自体が新しいものであったが、このような言葉を使用しつつ栄養への関心が喚起されていったのであり、しかもそれは、特別な場合における食事ではなく、普段の家庭料理こそが問題となっていた。このことに関して、生活改善同盟会でも、次のように述べている。「殊に日常食物の調理取扱に従事して居る人達は少くとも吾等が身体の栄養に食物の必要なる理由、健康に必需な^(マ)營養素及び其の分量、食品の良否鑑別方及び其の市価、並に滋養価との関係、食物調理の方法及び保存方等に関する一通りの素養は絶対的に必要であります」(『生活改善の栞』83ページ)。そして消費経済展覧会には毎日の家庭での「献立表」が展示されていた。

20世紀初頭から登場してくる、主婦を読者層とした『婦人之友』や『主婦之友』、『婦人倶楽部』などの実用雑誌において、初めて料理記事も本格的な展開をみせ、日常的に食する家庭料理が重視されるようになるのだが、このような状況を生活改善問題は反映しているといえるだろう。主婦たちは家庭で作る料理にある程度のレパートリーが要求されるようになり、栄養があってしかも安価なものはなにか、といった観点から毎日の食事の献立を考えていくことが必要となったのである。

さらには、消費経済展覧会の開催に示されるように、当時あまりなじみがない言葉であった消費経済が、生活改善の対象としてクローズ・アップされてきている。文部省は消費経済展覧会の開催趣旨を、「国民生活の各方面に亘り無駄の省略、消費経済等の観念を得しむると同時に、質実剛健の気風を作興し、勤儉力行して国民生活の能率を増進し、依つて以つて国民生活の安定を図り之を合理化せしめなければならない」(「緒言」『消費と経済』1922年)と述べているが、この消費経済に直接的な責任をもつのは、いうまでもなく主婦としての女性であった。消費経済展覧会では次のようなものが展示されていたが、主婦たちが、どのような知識をもつべきと考えられていたのか、これらの展示品から見て取ることができる。

飲食物——内外米の消費比較図、東京市の水道、肉類の一人一日消費分量調査、調理及食事の無駄、火の加減と料理法、主食副食調味品比価増減表、献立例・予算例、人体に及ぼす酒害、嗜好調査表

衣服装身具——衣服地の節約と国民経済、和洋服着用時間の比較、
国民一人に対する平均衣服数、改良服裁方、履物の生産消費額

住宅家具——既成日本住宅の改造、郊外住宅設計図、木炭の多少と
其の消費量、各種燃料代金比較図表、電力節約のための考案電燈器
具、薪と炭を瓦斯に改むれば

社交礼儀能率増進及産業状態——時間の利用、各階級生活費比較、
東京市に於いて消費する日用品は何製から来るか、贈答に関する日
米比較、節約と貯金、六大都市公設市場相場比較、派出婦需要概況、
信用組合、販売組合、利用組合⁴

このように、家庭の中で行われる衣食住の営みや社交、家計管理などを消費経済の名で総括し、それらを能率や合理化という観点から見直し、改善していくことが、主婦に対して求められていたのである。家庭における妻の責任は重大なものとなってきているのであった。

おわりに

以上検討してきたことから明らかなように、生活改善問題で追究された家族とは、消費や再生産の場に純化するとともに、性別役割分業が貫徹し、子どもを産み育てることを主要な価値とみなす家族であり、このような家族を前提にして、「よりよき」生活のあり方が具体的に提示されていった。それはとりもなおさず、私的な家族としての集団性を強め、家族生活を充実させていく方向での改善であり、家内領域を担う女性により一層の家事・育児責任を課していくものだったのである。そういう意味では、生活改善を通して近代家族の形成がめざされていたといえるだろう。

ところで、日本における典型的な近代家族といえば、日露戦争後、とりわけ第一次世界大戦後に産業化の進展に伴って都市部に本格的に登場してくる新中間層の家族を、誰もが思い浮かべるであろう。わたし自身もこのこと自体には異論はない。しかし、このような近代家族の形成を産業化の視点でのみ語っていくことにはためらいがある。というのも、本論で述べてきたように、生活改善問題を通して、政府もまた近代家族像を熱心に啓蒙していったからである。つまり、新中間層が登場してくるまさにその時

期に、国家もまた国家の基礎としての家庭の改善に着手し、あるべき近代家族像を啓蒙していったのであった。そういう意味で、生活改善問題は、私的な家内領域がけっして私的なものとして自律しているわけではなく、国家によって介入されていくものであったこと、そしてまた近代家族の形成にあたって、産業化のみならず、国家が果たした役割も小さくはなかったことを教えてくれるのである。

[注]

- 1) 生活改善問題に関しては、これ以外に次の論考も発表しているので参照されたい。「生活改善問題と女性」『女性学年報』第17号、1996年。
- 2) 拙著『良妻賢母という規範』勁草書房、1991年、161-165ページ参照。
- 3) 江幡亀寿『社会教育の実際的研究』1921年（復刻版、大空社、1991年）174-184ページ参照。
- 4) 文部省『消費と経済』南光社、1922年、3-15ページ参照。